WINDS CAFE 270 in 原宿 **打楽器百花繚乱 VI** 

~ここからはじまる未来~

Percussion Extraordinaire Vol.6  $\sim$ Hymn The WINDS CAFE $\sim$ 

2019年6月16日(日)

15 時開演 (14 時 30 分開場)

原宿:カーサモーツァルト

入 場 無 料(投げ銭式)



### **Program**

G.ビゼー(白藤淳一編曲): アルルの女より No.16 (1872/2019)

美しきパースの娘から「セレナード」(1867/2019)

演奏時間約4分

白藤淳一:宮廷の食卓の為の音楽(2019/世界初演)

演奏時間約6分

塚本一実:CENOTE for solo Vibraphone(2018)

演奏時間約12分

木下正道:すぐ傍らのもの Ⅲ(2019/世界初演)

演奏時間約5分

Intermission (10分)

正門憲也:遊戱第 27 番(2018)

演奏時間約7分

若林千春:飛び出し小僧VI ~ある来訪者への接待~(2019)

演奏時間約8分

梅本佑利: Landscape Erode into A for Vibraphone(2019/世界初演)

演奏時間約6分

Intermission (5分)

三関健斗:星が砕けた夜空を見つめて(2019/世界初演)

演奏時間約13分

菊池幸夫: 燎火(2018)

演奏時間約 12 分

佐原詩音:玉蟲の翅、その結び(2018)

演奏時間約16分

#### 會 田 瑞 樹 Mizuki AITA

打楽器奏者。1988 年宮城県仙台市生まれ。宮城県仙台第二高等学校を経て武蔵野音楽大学大学院修士課程修了。佐々木祥、星律子、吉原すみれ、神谷百子、有賀誠門、藤本隆文の各氏に師事。学部三年次に日本現代音楽協会主催第九回現代音楽演奏コンクール「競楽IX」において第二位入賞。2014 年 NHK-FM リサイタルノヴァ出演、第四回世田谷区芸術アワード"飛翔"音楽部門受賞。

2016 年 NHK-BS プレミアム「クラシック倶楽部」において會田の演奏を一時間に渡って特集した「打楽器百花繚乱 — Percussion Extraordinaire Mizuki AITA—」全国放送は現代音楽コンテンツの中でも異例の好評を博し再放送が続いている。これまでに 3 枚のアルバム『with…』(朝日新聞推薦盤)『ヴィブラフォンのあるところ』(レコード芸術特選盤)『五線紙上の恋人』(レコード芸術準特選盤)を発表しいずれも高い評価を得た。打楽器のための新しいレパートリーの発展を活動の中心に据え、これまでに 150 作品以上の新作初演を手がけている。

2018 年は薮田翔一氏の新作協奏曲初演を皮切りに、ISCM(国際現代音楽協会)世界音楽の日・北京大会において国枝春恵作品を中国国家交響楽団と共演し再演、7月には国際交流基金アジアセンター主催事業「Notes」アーティストとしてインドネシアを訪問し自作曲を含む新作初演、東京交響楽団との山内雅弘作曲《SPANDA ヴィブラフォンとオーケストラのための》熱狂的初演、10 月にはパリでのソロリサイタル、リトアニアにおいて、聖クリストファー室内管弦楽団と権代敦彦作曲《Saewol ~海から~ for Vibraphone and String Orchestra》世界初演と国境やジャンルの垣根を超えた幅広い活動を継続して行なっている。

<u>G.ビゼー(白藤淳一編曲) アルルの女より No.16(1872/2019)/美しきパースの娘から「セレナード」(1867/2019)</u> 本日の演奏会のオープニングはビゼーの二つの作品からお届けいたします。《ファランドール》でおなじみの音楽劇《アルルの女》原典版から掌の小品。みんなのうた《ちいさな木の実》でもおなじみの《セレナード》白藤淳一氏による編曲でお楽しみください。

#### 白藤淳 一作曲

宮廷の食卓の為の音楽(2019/世界初演)

この作品は三和音を中心とした、擬(疑?)古典的な作品を目指し、構成を行いました。しかし、私自身の性格がとてもマジメで、頭の中にコンクリートが入っているような応用の効かない、柔軟性に乏しい残念な展開になっている可能性があります。御存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、タイトルはテレマン作曲「食卓の音楽」の引用ですが、果たして宮廷とは一体どこなのか?2019年という時代から錯誤しているのではないか?という疑惑がありますが、擬似古典作品という訳でお許し頂きたいような、そうでもないような、失礼しました、ゴメンナサイでした。(白藤淳一)

# 塚 本 一 実 作曲

CENOTE for solo Vibraphone (2018)

この曲は、2009 年に作曲した"CENOTE"~for solo Marimba~(Universal marimba Composition Competition 2009 1位なしの2位および出版賞 Beurskens Muziekuitgeverij より出版)を、今回を機に solo Vibraphone に會田瑞樹氏のために編曲したものである。Vibraphone は余韻が非常に長く、Marimba とは全く違う視点による創作となった。

CENOTE~for solo Vibraphone~は、pulse(拍点)の存在を条件とし、pulse の直前(before the beat)、pulse の直後(after the beat)、pulse の正にその時(on the beat)という 3 種のタイミング (pulse には打音が存在している時と休符の時がある)で装飾音を飾りながら、演奏家が創る時間軸の揺れを楽しむ作品とした。

"CENOTE"とは中米ユカタン半島の低平な石灰岩地帯に見られる陥没穴に地下水が溜まった天然の井戸、泉のことである。この曲は、會田瑞樹氏への献呈作品である。(塚本一実)

# 木 下 正 道 作曲

すぐ傍らのもの Ⅲ(2019/世界初演)

「すぐ傍らのもの」は、短い独奏曲のシリーズとして始めました。これまでに楽琵琶と龍笛のために、それぞれ書きました。

我々は普段、注意を凝らして周りの世界に接していると思いがちですが、実際はそうでもありません。普段あまり存在を主張せず、何気なく在るものには得てして気づきません。その「何気ないもの」をさっと取り上げて、可視化、可聴化しようというのがこのシリーズの狙いです。

打楽器のために書いたこの「III」ですが、実は極めて厳密なプロセスに基づいて作曲されています。ある種の「崩れ方」すらも計算されています。それを人間の身体によって、いわば「隙間-化」するのがこの曲の狙いです。その結果、普段は気づかないような演奏家の身体の、赤裸裸な、生の息吹を伝えることを目論んでいます。時間と空間がひっそりと変容する様を、ぜひお聴きください。(木下正道)

#### 正 門 憲 也 作曲

遊戯第 27 番(2018)

遊戯は私の中での「音の運動・遊び」の作品群で約 40 作ほどあり、うち独奏作品は数曲しかありません。「合わせ」から生じる新たなリズムを追求する手法のためですが、今回は久々にソロ曲を書くことにしました。

若い頃を除き、特殊な奏法は使わず、例えば、弦楽四重奏ではピチカートも躊躇したり、管アンサンブルでミュートは使わず、楽器の持ち替えも無しといったものがほとんどなので、今回のヴィブラフォンでも、他の楽器を登場は無く、マレットは2本のみ。後発の楽器であるヴィブラフォンに寄せて「現代における古典的なもの」を書いてみたいと思いスケルツォと副題を付しました。難度は高いですが會田さんの素晴らしい演奏を楽しみにしています。(正門憲也)

共鳴すること 共鳴しているということ そう 共振しあうこと この状態を希求する願いが 筒という原初のカタチを選びとる

紙と神 発音を同じくする 形状的・形而上的な表現へのベクトル (紙筒も気管も 同じ形態なのだ)

あとは 降臨の契機 もしくは 言い訳の発端を 待つのみである(若林千春)

《テクスト》

ある來訪者への接待 尾形亀之助 どてどてとてたてててたてた たてとて てれてれたとことこと ららんぴぴぴぴぴ 78 とつてんととのぷ んんんん ん

てつれとぽんととぽれ

みみみ ららら らからからから ごんとろとろろ

ぺろぺんとたるるて

<u>Landscape Erode into A for Vibraphone(2019/世界初演)</u> 本 佑 利 作曲 「A に侵食する風景」そう、まさに、A 音に侵食する音の様子が描かれています。侵食する音た ちは、「A」にいつもまとわりつき、かき消そうとしたり、いろいろな方法で邪魔を仕掛けます。

僕は誰かに曲を書くとき、名前から発想するということが多いんですが、今回もそうで、會田瑞樹さんの「AITA」の「A」、ABC の「A」、「A」という音の支配感、みたいなものをイメージして 曲を構成していきました。「AITA」のAに始まり A に終わるというイメージも合わさり、最後に は「A」音が、全て違うマレットによって執拗に鐘の音が繰り返される「勝利宣言」によって、曲 は締めくくられます。

僕の曲によくある、音の流れに割り込むように入り込む「音」。流れを一旦せき止めさせる。それ によって強い支配感を持った「音」を置く。そういった「音のエネルギーの流れ」みたいなものに フォーカスを当てた曲でもあります。(梅本佑利)

2002 年東京生まれ。

2018年秋吉台の夏 現代音楽講習会のコンサートシリーズ アンサンブル秋吉台にて、「Automatism1a, 1b」が ヴァイオリニストの松岡麻衣子氏によって初演。 その後もいくつかの新作初演を重ねている。

モスクワ音楽院作曲科マスタークラスにてイリーナ・デュプコワに学ぶ。 作曲を荻久保和明、松下倫士、川島素 晴の各氏に師事。 現在、東京音楽大学付属高等学校 作曲科2年に在学。全日本ジュニアクラシック音楽コンクール 第二位。

https://yuriumemotojp.jimdo.com/

Twitter: @yuriumemoto

三 関 健 斗 作曲

星が砕けた夜空を見つめて(2019/世界初演)

煌めく音、伸びている音。ヴィブラフォンという発音体からは色々な音が発されている。鍵盤の中心あたりを押さえることで得られるハーモニクス、極端に速いパッセージ、マレットを押さえつける音などの普通ではない音によってこの作品が形作られている。全体は3部に分けられ、前の2つの部分ではそれぞれに特徴を持っていて最後の部分はそれまでの流れを受け継ぎながら変容していく。作品を通して様々な音色を追求していて、星が飛び散っているような連符を主体として音楽は進行していく。そうしてこの目が回るような作品が出来上がってしまった。(三関健斗)

1996 年生まれ、北海道札幌市在住。

第13回弘前桜の園作曲コンクール高校の部第1位、

第16回弘前桜の園作曲コンクール一般の部第2位、

第 18 回 TIAA 全日本作曲家室内楽部門奨励賞。

札幌大谷大学芸術学部音楽学科作曲コース作曲系

演奏クラスとして「音の輪コンサート」に出演。

自身の編曲作品が N 響首席トランペット奏者辻本賢一氏

などによって演奏される。近藤譲氏の作曲レッスンを受講。

作曲を小山隼平、田中賢の各氏に師事。



# 菊 池 幸 夫 作曲

<u>燎火(2018)</u>

"燎火(にわび)"は、"庭火"庭燎"とも表記され、古くは神事の庭に焚く神を招く篝火を表し、あるいは、祭事や祝典の際の照明として庭に灯す火を意味する。庭に組まれた柱に灯された火は、粛々と燃え盛り天へと掲げられる炎となり、人々と神(神聖なるもの)とを繋ぐ鎹となる。庭というごく身近な日常の空間が、非日常の儀式を通して、両者を結び付ける特別な役割を担う場として介在することはとても興味深く、そこに私の考える音楽作品のあり方と相通じるものを感じた。どこか卑近でありつつ幻惑的なヴィブラフォンの煌然たる響きによって、激しくときに静かに光を放つ厳かな炎のさまを、さらには、日常と背合わせにふと感じることができる神聖なるものへの崇敬の念を、この作品に託したいと思った。(菊池幸夫)

#### 佐 原 詩 音 作曲

玉蟲の翅、その結び(2018)

玉蟲の翅は、光の干渉による金・青緑・紫などの色調変化により、その色合いが刻々と移り変わります。人の感情もグラデーションのように曖昧で捉えようがなく、留めることはできません。しかし、日本古来、移りゆく景色には必ず「結び」が存在すると言われます。ウムス(産むす)+ヒ(霊的働き)を持って連続する生命が奮い立ち、死してなお色褪せない光沢や、刹那に消える響きの流動に、その魂が垣間見えるということです。玉蟲の語源は魂を意とするので、情感変化が一つに帰結していくモチーフとしました。

はじめて會田瑞樹さんと音楽の話をしたとき、作曲家・八村義夫に心酔していることをお聞きし、 私も受験時代に上野の東京文化会館音楽資料室で彼の音楽を深く聴き入った記憶が蘇りました。そ の後、ドラマチックで激烈な情感や、浮遊するミステリアスな心象など、八村さんの音楽と共通す る會田さん自身の演奏や人間性を知りました。

こういった思い出からもインスピレーションを得て、情感のグラデーションを6つの楽想に、心の深奥にある魂を Thema(冒頭の旋律や最後の音程)とし、全体のイメージを玉蟲の翅に重ね合わせて描いた音楽です。(佐原詩音)

# 速報

2020 年、會田瑞樹はデビュー十年目を迎えます。 2020 年 4 月、乞うご期待!!